

わが『自定年譜』

高 田 淳

個人の年譜は、一般にその人の死後に編せられるのが通常である。いま編集子の慫慂によりここに記すのは、さきに還暦を前にして「わが『自述学術次第』」を書き、今年の三月に古稀を前にして「書信と書評によって綴るわが『自述学術次第』（続篇）」を書き終えたばかりのタイミングのよさのためである。「自定年譜」と称するのは、さきの「自述学術次第」と同じく、章炳麟の『太炎先生自定年譜』に倣う。五十五歳の章炳麟は、民国十一年（一九二二）までの生涯を時代情況に触れながら書き記している。以下に記すところは私自身の閱歴に関することに限り、学術についてはずでに述べたので言及しない。

出生と幼年時代

大正十四年（一九二五）五月二十八日、京城府高陽郡崇仁面清涼里に生まれる。父真治は明治二十六年（一八九三）八月六日、高田豊一の三男として大分県宇佐町に生まれ、母ユキは明治三十六年（一九〇三）三月二十六日、皆

川正禧の長女として新潟県津川町西村に生まれた。父母の結婚は大正十年（一九二一）である。父が大正九年（一九二〇）創設されたばかりの水戸高校に赴任し、英文学担当の皆川正禧と同僚であったことに因る。結婚したとき、父は二十九歳、母は十九歳。そして大正十三年（一九二四）京城帝国大学予科が設立されるとともに父が赴任し、その翌年に私が生まれたことになる。

長男彬は生後間もなく殤死、私は二つ上の千波（水戸の千波湖に因む）のあとの次男である。私が今に至るまで長男の役割を果し得ていないのは、次男という資質のためである。淳という名は淳宮（秩父宮）により、一歳下の光子が光宮（高松宮）によることは、後で気がついたことである。

昭和三年（一九二八）から昭和五年（一九三〇）まで父はドイツに留学し、その間私は母の郷里津川町西村で過す。三歳から五歳までの幼年期をそこで過したことは、阿賀野川畔の山河が私の故郷として刻印されることになる。父の帰国後東京の杉並区大宮前に移った家は、祖父皆川正禧の家の東南に接し、私は間の垣根を越えていつも祖父の家に遊びに行っていた。私は祖父の鍾愛を受けており、父よりも祖父の文学の世界に親近感をもっていたようである。

小学校は高井戸第六小学校、南に麦畑の間の細い路を二十分ほど歩いて通った。はじめ成蹊を受けて（受けさせられて）、何やら遊戯のようなことをやらされた面接を覚えている。私立名門校に落ちて通常の小学校に入ったことは、私にとって幸いであった。近所の子供たちとメンコやベーゴマ、そして蠟紙飛ばしをやり、近くの溜め池に集まるギンやチャンのトンボ取りに少年の興奮を味わうことができたからである。また西村には梁（やな）があり、鮎や鮭が囲炉裏の上にぶら下り、祖父と西村へ帰るときは津川まで船頭が迎えに来て舟で帰るのが通例であった。

中学時代

昭和十三年（一九三八）、東京府立第十中学校に入学。新設校の二期生で、一年間は青山師範あとの仮校舎に電車通学をした。原宿駅からは、銀杏並木の長い参道を南に歩いて通った。母の子であった私の前に、父が立ち現われたのはその頃からである。入学を期として『孝経』の素読が行なわれた。何やら互いに気恥しい思いをして向かい合っていたことを覚えている。父の九州への帰郷に連れられ、大阪からは貨物船に乗って瀬戸内海の船旅をしたことがある。父は男の子として私を教育しようとしたのであろう。

小川先生（渾名はカバ）が生徒に日記をつけることを課し、私が下手な漢文で書いたのも父の子として振舞おうとしたのかも知れない。同学に清水雄二郎（尾崎雄二郎）がいて、四年で東亜同文書院を受けるとき父に相談したいというので紹介したことがある。すでに一人前の青年の志をもつ清水に、些かの羨望の念と後めたさを覚えた。しかし私は相変らず西村の居心持のよい世界にひたりながら、一方大詔奉戴日には明治神宮まで行軍するという軍国主義教育の下で、着実に迫ってくるその時への心準備を始めていた。昭和十六年（一九四一）十二月八日、大東亜戦争突入のときは十六歳の四年生、そして昭和十八年（一九四三）二月一日ガダルカナル島撤退開始、ついで四月十八日山本五十六がソロモン群島上空で戦死した頃、私は第一高等学校文科丙類に入学していた。

一 高入学から捕虜

市原豊太先生がクラス担任で、川口篤先生とともにフランス語を学んだ。中寮二十四番の棟華会と東洋文化研究会に入り、曲りなりにも旧制高校の最後の残影のときを過した。そのとき父から『資治通鑑』を読むことをすすめられ、

これは始めの方をめぐっただけで、その歴大な文に辟易して放擲した。それよりも私にはやるべきことがあった。父の存在が重荷に感じられたのも、その頃からである。

大正教養主義の流れを汲む旧制高校の「人生とは何ぞや」という哲学青年的悩みとともに、戦争末期を予感させる状況の中で「わが死をいかに迎えるべきか」という問題である。私はまだ生きたかったのであろう。まともな授業と寮生活は一年間だけで、二年目は勤労働員で寮を離れた。日立の望濤寮で子供の權るハシカになり、日立病院に入院。四十度の高熱に冒され、意識不明の数日を送ったことが、十九歳までひたすら向上の道を歩んできた私を「死に至る病」の前に崩壊させる契機となる。退院した私は「戦線復帰」をせず、そのまま母が子供たちと疎開していた宇佐に行き、また山陰線北陸線を乗り継ぎ西村への感傷のひとり旅をしたりして、ひたすらその時を待っていた。一高にはすでに休学届を出していた。

当時は大学に志望を出せば試験なしに入学できる特典があったが、私は休学することによって自らその路を絶った。将来への展望がないとき、かりそめの決断にわが人生を託したくなかったといえは恰好がよすぎる。少なくとも私はそのことを未決のままにしておき、いまの状況を引き受ける他ないと覚悟していた。理科に転科すれば兵役を免れることも知っていたが、私はしなかった。

ひたすら二十の死を妄想していた昭和二十年（一九四五）の一月末に、「待っていた」赤紙が来た。父の本籍地の大分連隊はすでに戦車隊に改編され、私は都城の連隊に入営した。父の家で工藤篁先生と文丙同級の山本悟を招いて送別の宴が開かれ、空襲のその夜東京を発った。母のいる宇佐での数時間後、宇佐八幡駅で「歓呼の声に送られて」母と別れた。

都城には一ヶ月ばかり居て、内務班で鍛えられた。やがて銃を持たず、ぼう剣だけの装備で、アメリカカ潜水艦の攻

撃におびえながら真夜中の女界灘を渡った。釜山からは列車で北上、着いたところは安東（丹東市）の独立守備隊であった。閔東軍の精銳が南方戦線に転出し、われわれ学徒兵の新兵が補充されたのである。初めて大陸の地に立った私は、人の歴史を超えた太古のにおいを嗅いだような氣持がした。天と地の氣には、においがある。

後ろ弾が飛んでくるといふ野戦部隊は、都城とは多少異なるところがあつたが、完全武装での連日の演習は肉體についての『唯物論』的考察を深めさせ、また肉體酷使による餓鬼道に対しては武士は食わねど高楊子の『唯心論』的瘦我慢の精神を教えてくれた。

半年ばかり後、奉天（沈陽）を経て魏子窩へ転出。南に長山群島の島影を眺める海岸に在つた。このとき幹候志望のことがあつたが、私は志願しなかつた。地方出の古参伍長が、お前たち学徒兵は将校になつて威張る奴らだといつた『階級的』發言を聞いたからではない。拒否することだけは、優柔不斷の私にもできることであつた。アメリカ軍の上陸に備えて、海岸の砂地に対戦軍壕を掘らされているさ中に敗戦を迎える。兵舎の前に整列して玉音放送を聞き話の内容はよく分らなかつたが、とにかく戦争が終つたらしいことだけは理解した。少年時代から終りのないように思われた十五年戦争が終り、重苦しいものが取り払われて、まずは私自分の生命が続けられそうだといふ、まことに利己的感慨だけであつた。しかし、それからまた別の黒い時間が始まろうとは、全く知る由がなかつた。

柳樹屯に集合して、われわれはソ連軍に武装解除された。毎日手入れをしてきた小銃が地面に野積みされたときは、更めて敗戦の實感を深くしたが、その晩官給品の日本酒を飲んで大酔したことは、解放の儀式であつたのだろう。しかし、それはただ帰國の幻想に酔つていただけのことであつた。それでもまだ軍隊の様をなしていたわれわれも、大連の星ヶ浦まで歩かされ、支給された被服類を荷車に乗せたり天秤で担いだりして長い路を重い足を引きずつた姿は、まさしく敗残兵そのものであつた。途中ソビエト軍の武骨な重戦車やロケット砲を載せた車両、そしてマンドリンと

称する連発銃を抱えた若いソ連兵を見たとき、わが日本の敗北を妙に納得したものである。大連市内に入ると、頭を丸坊主にした男装の日本女性の姿があった。

星ヶ浦は日本人の高級保養地であったが、疲れ果てて到着したわれわれは、その晩、未明に及ぶ使役を課せられた。海岸の砂地にめり込む大八車に積んだ荷物を、ただ一方から他方へ移すという何の意味もない、まさしく懲罰のための報復行為であった。夜通しひびくソ連兵の酒に酔った凱歌のうたごえを聞きながら、シジフォスのような無益な苦役に従ったわれわれは、やがてソビエトの収容所（ラゲッ）の実体を知らされることになる。

暫くして何処かへ移送されることになり、無蓋貨車に積み込まれたわれわれは、一晚を旅順という死の空間に放置された。秋露にさらされ、いつまでも発車しない暗夜の中でわれわれは不安に脅えていた。軍事施設の労役に服したあと、人知れず殺されるのだという噂が囁やかれた。息をひそめて旅順要塞の闇に閉じ込められていたその夜のことには忘れられない。意志を剝奪されて未決の時間に耐える他ない、底なしの真黒な不安そのものであった。人知れず葬り去られることは、戦って死ぬとは全く別の、無意味な「物」としての己れを引き受けることでしかない。

しかし、移送されたところはすぐ近くの南関嶺であった。途中、満洲のことはよく知っていると、兵長が脱走したが、警備のソ連兵に撃たれて死んだと聞いた。シベリアに移されなかったのは、全く万分の一の僥倖にすぎない。それは私の体力が耐えられたものとは思えない。

捕虜の仕事は、満洲に残された日本の資材をソ連に運ぶことであった。分厚く重い鉄板や、アングル・チャンネルと称された鉄筋やセメント、そして工場を解体した木材などを、旧満鉄の大きな貨車に積み込んだ。アメリカ製のトラックに乗せられて管口まで行き、そこで巨大な材木を積み込んだり、あるいは大連の近くの丘陵地帯で新築の壁塗りをしたこともあった。食糧が途絶えて数日間大豆だけのこともあったが、鯖（ひよ）の塩漬と黒パンの一切が常食だった。

一般に捕虜生活は、兵營よりも自由だった。はじめ私はヒューム管の中に寝具一切をもち込んで、恰もティオゲネスのような独居生活をした。アカシアの白い花が風に翻る暖い春のときである。私はその中で何処からか拾ってきた小説を読んだり、日記を書いたりしていた。一冊のノート（古兵が心臓の上に刃の形を画いた『忍』の一字を表紙に書いてくれた）が終ると、セメントの内袋の二枚を切り綴り合わせて、二冊の捕虜日記を書いた。持ち帰った三冊は、まことにセンチメンタルな内容であるが、まさしく二十歳のエチュードである。

また私は質樸な宮崎の農民とヤクザ風の後藤一等兵との三人で、奇妙な共同生活を送ったことがある。小隊の情報係を任せられた私はラジオで多少の情報をえており、『インテリ』の私はかれらの世故に通じた知恵に助けられて、生きるということを学んだ。使役に行つて麻袋から白米を盗み、三人でひそかに分けあつて食べた。今迄にあんなうまいものは食べたことがない。この一年有半を通じて『戦友』であつた油野正義氏とは、今なお交わりを続けている。

復員と復学

ダモイ、ダモイという自らの作り出した幻想を食いつなぎ、何度も裏切られたあげく、大連から博多に帰国したのは、昭和二十二年（一九四七）の四月始めであつた。アメリカのDDTの白い粉をかけられ、ポツダム上等兵として何がしかの金一封をもらつて、さてどこに帰るべきか。眼鏡のたまを一つ失いこわれた片方のつるを紐で耳にかけ、飯盒とさじ一つを後生大事にもつた私は、運を天に任せて東京に向かつた。窓の破れた中央線に乗り西荻窪駅に下り、幸いに焼け残つた家に帰つた。しかし、父母とともに姉妹や弟たち六人と再会できたのは、家主に逼られて二階の二間に八人が押し込められていた戦後のタケノコ生活であつた。私には居るべきところがなかつた。

父は昭和二十三年（一九四八）一月に教職追放され、二十七年（一九五二）三月に解除されるが、昭和三十一年

(一九五六)に大東文化大学に招かれるまで職がなかった。私の帰還を喜んでくれた父に対し私がいったことは、再び学生生活を続けたい、ついでには学費や生活費など自分のことは独りで始末をつけるが、家の経済の援助はできないということばであった。無残な放言を、父は許してくれた。食糧買い出しは私がリュックを背負って出かけたが、基本的には母に一方的に依存していた。着物の売り食いと、西村からの物資である。

私は捕虜生活に耐えてきたという自負から、肉体労働でも何でもやれると思っていた。新大久保の南の立ちん坊で土木仕事をやって二コ四ンをもらったが、さすがに雨中の仕事はつらく一度だけでやめた。北千住のテックス工場で炎天下の一夏、アルバイトをしたこともある。住居は一高の北寮三十一番、元老部屋と称するところが確保できた。門脇卓爾、後藤昌次郎、橋本裏爾など、昭和十八年組がいた。基本的には数ヶ所の家庭教師で生計をたて、住込みもやったが書生扱いに腹を立てて、それは一ヶ月でやめた。Dave de Parisという、木版画の付いた、パリコミュニケーションを扱った一冊の下訳を引き受けたのも、アルバイトの稼ぎのためである。授業には余り出席せず、おかげで成績はビリから二番目だった。

大学進学と大学院

昭和二十四年(一九四九)四月、東京大学中国文学科に入学。はじめは戦後の流行に従って、フランス文学科志望だった。担任の麻生磯次先生に相談に行き、あなたは中国をやりなさいとの一言で決まった。決めさせられたというべきか、逃げられないと覚悟したのか。中国文学科は工藤篁先生が指示された。私はまだ、意志決定ができないでいたようである。そのころ、工藤先生から西順蔵先生を紹介された。

中国文学科に入ることを父に告げたとき、父は他事はいわず、ただ外国の中国研究の視点をもとに教えられた。父

はドイツに留学しフォルケの中国哲学研究をやったことがあり、これは私のグラネの中国思想論に結果的につながったのかもしれない。

学部時代は、はじめ中国文学科の研究室には近寄らなかつた。昼休みはひとりでアーケードの近くに佇んで時間をすごした。尾上兼英や新島淳良に誘われて魯迅研究会に入ったのも、自発的ではない。まだ捕虜の残影を負って、戦後民主主義には馴染まない気持があつた。革命近しのアジの中で、お茶の水駅近くの警官隊との衝突にまき込まれたこともあつた。

上野雄二（津島雄二）に頼んで、下高井戸の上野家の山林の一軒家で自炊生活を始めたのも、寮から出なければならなかつたからである。数学科の宇沢弘文と六畳の一室で枕を並べ、夜中に宇沢さんが灯りをつけてむつかしい数学書を読み出すのには睡眠を妨げられた。マルクスは二十歳で経済学を始めたのだから、自分もこれから経済を勉強すると宣言し、かくていまのひげの数理経済学者宇沢弘文になつたのである。隣りの四畳半には早稲田の藤家礼之助が居た。しばらくして玄關脇の洋間に黒須重彦が入つた。藤家が去つたあと、黒須の母上が来られ、以後食事の世話になつた。藤家と黒須は同人雑誌をやり作家を志していたようであるが、藤家は東洋史学者になり黒須も中国文学の教授となつた。黒須の結婚式は、宇沢と私が仲人役をつとめた。そんなわれらの時代だつた。

マルセル・グラネのパンセの翻訳五六〇枚と論二二六枚を書いて卒業論文としたのは、その部屋であつた。横文字でまさしく横卒したわけで、すでに二十六歳になつていたがまだ目標を正面に据えていなかった。経歴としては、昭和二十七年（一九五二）三月卒業、同四月大学院入学となるが、そこに大きな転機が二つあつた。

それは倉石武四郎先生から助手の職をすすめられ、私は東洋文化研究所を志願するといつてお断りしたことである。そして詮衡に落ちて、私は行くべき道を失つた。当時、私は王子の東京書籍の編集部にアルバイトに行つていた。下

高井戸の家の西隣りに住んでおられた一高の先輩の橋本乙次氏のご紹介によるもので、詮衡に落ちた私は橋本さんから正社員にならないかとのお誘いを受けた。生活の不安定に揺れていた私は、それもわが人生であると殆ど決定しかけていた。当時渋谷の代官山アパートに居られた後藤基巳家でいつも酒をごちそうになっていた私は、話のついでにそのことをご相談した。後藤さんはとにかく大学院に入って、以後のことはその間に決めればよいといわれ、私はそのことばに従った。またしても私は、未決のまま事を先延ばしにしたのである。

いわば梁山泊のような山林の生活は、そこに上野家が家を建てるということで終り、私はリヤカーに荷物を積んで永福町まで運んだ。新島淳良の紹介による副島さんの二階の六畳間であった。新島さんの家から百米ほどである。北風の吹く冬の日、ポンプで汲んだ井戸水も盥で洗濯板で洗うのは冷たかった。石油コンロでの自炊生活のためか、年末にはいつも高熱を發して寝込むのを常とした。新島さんが付き添って看病をしてくれたのは、有難いことだった。

昭和二十八年（一九五三）四月大倉山学院が設立されたとき、給費生として入ったのは西先生のご配慮による。昭和三十一年（一九五六）三月まで続いた。昭和三十年（一九五五）四月、学習院男子高等科の国語講師となったのも、西先生のご推薦による。西先生は学習院大学哲学科の講師をされていた。そして昭和三十二年（一九五七）四月、正式に高等科の教諭となった。倉石先生が安倍院長と訪中の旅に同行され、安倍院長からの依頼のはなしを西先生と計ってきめられたのだと、あとで知った。

学習院高等科

昭和三十九年（一九六四）三月までつとめているから、二年間の講師時代を含めると九年間になる。私の三十歳台のすべてであり、大学院をやめて初めて学生の身分から解放されたせいも、ひたすら教員仲間と飲んでいたときであ

る。金澤誠御大をはじめとし、小倉芳彦、犬養廉（のち北大、中央大、お茶の水大）、松崎仁（のち立教大）、梅谷文夫（のち一橋大）、浅井清（のち金沢大、お茶の水大）、島田良二（のち茨城大、千葉大）、高橋利治（のち東洋大）、越沢浩（のち成蹊大）、服部周一、正田義彰、田中政治、河野政治、岡崎博之、越田稜、湯浅泰雄（のち大阪大、筑波大）、辻邦生（のち立教大、学習院大）、佐藤猛郎（のち帝京技術科学大、帝京平成大）、高橋新太郎（のち学習院短大）、鈴木一正（のち福岡教育大）などの面々がいた。飲む相手にはこと欠かなかったのである。

住居は昭和三十年ごろ、永福町から水沢利忠氏の紹介で池袋の要町中川家の洋間に移った。住込みの家庭教師をしながら、池袋まで歩いて高等科に通った。二年ばかりの後、池田醇一氏のご厚意に甘えて笹塚の池田家の居候となった。池田温さんとは隣り合わせの一室であった。森ふさ氏の手料理をご馳走になり、森さんが不在の折は池田老自ら作るところの玉子焼や烏賊の煮付を食べた。

昭和三十三年（一九五八）三月三十日、前年高等科教諭の定職を得たことを期として、橋本萬理と結婚した。イグナチオ教会でホイベルス神父の司会、後藤基巳・優美ご夫妻の証人による。萬里がカソリックであったからである。披露宴は会費制で、安倍院長まで徴収したので安倍さんが苦笑している写真が残っている。司会は小池鈺次さんがつとめ、水沢利忠さんのお嬢さんがバイオリンを弾いてくれた。

新居は池田さんの家の近く笹塚の二階の二間であった。池田さんが温雅な字で標札を書いて下さった。すぐ近くに卓球場があったからであり、当時私はピンポンに凝っていた。やがて抽選に当り、建設中の多摩平団地のテラスハウスに転居。庭つきで、草花を育てることはそこから始まる。池田さんが丹精をこめていた笹塚の庭がモデルであった。朝六時半に家を出る長距離通勤が何年か続き、浅沼科長に申し出て目白の舎宅の四階に移った。

六十年安保（昭和三十五年）に高等科教員有志の声なき声の会の一員として国会デモに参加したこともあったが、

二度の主管をまずは無事につとめ、田所義行氏のご推挙により東京女子大学に移ることになった。その間、渡辺末吾先生のご病気で女子部の兼務講師をつとめ、また都立大学の非常勤講師となった。前任の西先生のご推挙によるものと思う。なお榎一雄氏からオーストリアのシドニー大学のはなが打診されたが、単身赴任では困るとダダをこねて立ち消えとなった。山歩きが好きだということで山岳部長を仰せつかり、また音楽が嫌いでないといったために音楽部長をつとめた。

東京女子大学

昭和三十九年（一九六四）四月から昭和四十七年（一九七二）三月までの八年間は、私の四十歳台の栄枯盛衰のすべてであった。初めての大学生活、そして多くの紀要や機関誌があり、高等科の鳴かず飛ばずの時と違って、私は多くの論文を書いた。日本文学科に所属し、比較文化研究所の所員を兼ねた。

私が行なった第一のことは、中国語の授業の創設であった。一年間の試行期間を経て、翌年から外国語履修の正式な課目となった。もう一つは、古川久先生の強力なバックアップがあって、日本文学科の中に中国文学コースを作り、日本文学と国語学とともに三コース鼎立の形にしたことである。中国哲学をも含めて講義、演習の形をととのえた。今から考えると、よくぞ実現できた当時の猪突猛進ぶりに却って忸怩たるところがある。中国語の夏季合宿は霧積温泉をはじめとして各地で毎年行ない、今村与志雄、尾上兼英、戸川芳郎、木山英雄の諸氏も参加された。学生諸師も熱心で、中国語の劇を学内で公演するまでになった。

昭和四十一年（一九六六）に文革が始まり、毛沢東の影が日本の学生運動にも影響を及ぼしつつあるとき、四万の田村旅館で中国語の合宿が行なわれた。折しも佐世保エンブラ反対闘争があり、それに参加した一年の学生が情熱を

こめて報告をし、白熱した議論が行なわれた。それが全国的な学生運動に展開し、女子大「斗争」に至る前触れであるとは、私はそのときまだ予知できなかった。

教室での討論会や全学討論会、そして学生の大学封鎖のあげく、新築したばかりの本部棟の封鎖解除。それは夜半に始まった。私は先頭に立てなかったが、学生から投げつけられる臭い台所ゴミの「弾丸」を身に受けて進む中村陽一さん（のち学習院大）のすぐ後に従っていた。後で聞くと、中村さんは海軍の少尉であり、私はポツダム上等兵にすぎなかった。階段に積み重ねられた机や椅子のバリケードを排除し、四階のロビーまで「攻め」上った。「両軍対峙」の中で、私が「休戦」の訴えを叫んだせいか、赤い染料の入ったバケツの水をかけられ背広一張を台無しにした。ハト派と称され学生と「内通」していると噂されたある教授の研究室が、学生に「粉碎」され書籍が散乱しているのを目撃した。

この擬似「戦争」は、戦後からの私のアイマイな構え方を捕虜時代のラーゲリ体験へ回帰させるという形で崩壊させた。肉体的に心臓発作を起させたばかりでなく、精神的な没落感覚の中で異様な夢を見るに至った。東大「斗争」の責任を負って辞任された藤堂明保氏の後任として、前野直彬氏から中国文学科にお話があったことを契機として、私は女子大をやめた。出処進退からすれば、それは決して潔いといったものではなかった。私はそのときに留まるべきであったと、いまは思っている。

なおこの間、都立大を継続していた他、学習院大学の中国語講師、東京大学東洋文化研究所の研究員、一橋大学の大学院の講師、日本女子大学の講師、紛争中の和光大学の講師、そして静岡大学の集中講義などをした。

住居についていえば、学習院の舎宅を出た私は、女子大の三鷹は新川の舎宅に大森志郎先生と同居した。魁偉な大森さんが大きなたくましい手に鋤を握って土を耕し、花を育てておられたことは、池田さんとはまた別の花の道を教

えて下さった。また帰路が同方向の古川久先生とは、帰宅途中の吉祥寺の居酒屋で酒杯を交わすのを常としていた。そこが売却されるというので転居を迫られ、昭和四十三年（一九六八）三月末に、いまの小平に家を建てた。ついで棲家ならぬ墓をお作りになったと、ある人からいわれた。

東京大学

昭和四十七年（一九七二）四月から昭和四十九年（一九七四）三月までの二年間は、大学紛争のいわば後衛戦、後始末の時期であった。まだ戦いの余塵がたちこめていた東大構内は、その前すでに武装解除されていた私にとって、もはや戦いの場所ではなかった。女子大とは異なり、より普遍的特殊な問題をかかえているように見えた戦線に配属された私は、闘争の末期的状況にいた学生たちといわば互いに「折り合い」をつけるといった態のものであった。とくに大里浩秋さんとは、いつも落第横町で大酒を飲んでは何か分らぬ議論をしていた。私にとってそれは、戦いの意味を再確認する時であり、また一種の戦士の休息を与えてくれるくつろぎの場でもあった。そこのおかみと親密になって、けしからぬ仕儀に及んだこともあったようである。そのために、事実私は東大を落第した。

またそのころ、二三年のあいだ木山英雄・伊藤虎丸の両氏を中心として、東大闘争の「闘士」たち数人と『金瓶梅』を読んだ。北京に単身赴いていた西川優子さんが不在で、ひとり「弧閣」を守っていた尾崎文昭さんの寓居に集まり、「主義革命」の大義ならぬ「飲食男女」の大欲の世界にしばし浸ったのも、戦いのあとの傷痕を癒すための儀式であったのかもしれない。秧歌姿ヤンゴの西川さんの艶麗な写真が、われわれ男どもの鬱屈を欄間の上から見下していた。

母が亡くなったのは、昭和四十八年（一九七三）七月六日、七十一歳であった。私が母に東大をやめたいといい、母から父にはそのことをいわぬ方がよいと戒められた記憶があるから、東大に行った早々から考えていたことになる。

なぜやめたかについてはいろいろ風評があるが、後になって金澤さんが「高田はテニスをやりたいからだ」といわれたことが最も真実に近い。もとより、大学はテニスをやるところではない。理由はいくらでも挙げられるが、基本的には東京女子大をやめることになった事由の延長上に、東大での私の唯一の役割が終ったと思っただからである。

『離脱作戦』は、その年の夏、雷雨の西片町の小倉邸訪問によって始まった。沢口剛雄氏の後任を襲う形で進められ、私の我儘は私を招いた下さった前野直彬氏をはじめ多くの方がたの寛容とご助力で一年後に果された。父が八十歳で亡くなったのは昭和五十年（一九七五）十一月二十四日であるから、すでにやめたあとであった。私は母にいわれた通りそのことを告げなかったし、父もそのことを知ってか知らずか問わなかった。

本郷の研究室では所在なしに足を机の上に投げ出して分不相応の椅子に身を埋め（西川優子さんが目撃証人で、会うたびにからかわれる）、夕方になると落第横町をさまよっていたばかりではない。図書館に通って「民立報」など辛亥直後の新聞のコピーをとることに没頭した。コピーという新しい武器を使ったのは、そのときが初めてであった。また章士釗を追うことは、『反革命分子』の陰影を私の目で確かめたいからでもあった。

学習院大学にて

昭和四九年（一九七四）四月、めでたく学習院に復帰した。非常勤講師としては継続していたが、十一年ぶりの復帰ということになる。沢口先生の後任ということで一年間は国文学科に属していたが、金澤さんをはじめとする史学科のご配慮により史学科に転じた。中国語を主とし、東洋史・中国哲学・中国文学にわたる変則的なもので、私のことばでいえば史学科の庇を借りた寓居であった。創設されたばかりの言語共同研究所の所長を一期つとめたのは、東大からの転出の理由であったからである。東洋文化研究所の所員も、暫くつとめたあと辞した。

それから二十二年間、私にとっては最も長い時期に私がやったといえることは、ただ一つ中国語専任として原島春雄氏を迎えたことだけである。中国文化学科構想が一時起ったが、結局机上のプランで棚ざらしになった。その間、日本女子大の大学院を数年やり、愛媛大学、山口大学、熊本大学、京都大学、東北大学の集中講義に出かけた。また中国旅行は、野原四郎・松枝茂夫・西順蔵三老を中心とする記念すべき初の訪中と、松枝先生を団長に戴いての紹興の旅、そして三回にわたる王船山を求めての衡陽への旅があったが、それを最後として私は意識的に中国へ行くことをやめた。浜田耕策さんとの韓国への旅は、私の生地京城確認のセンチメンタルジャーニーであった。それを「旅の終り」と題したように、失われた時を求めての私の旅もすでに終ってしまっていたようである。ただ一つ、捕虜となつた大連再訪だけは残されているが。

私はこの二十数年の間に、多くの師友を失った。野原四郎、増淵龍夫、工藤篁、後藤基巳、西順蔵、大森志郎、古川久、末松保和、金澤誠、高橋利治、服部周一、池田醇一、森ふさ、関戸恵美子、長野広生、澤谷昭次の諸氏……。そして今年の七月十三日、高等科時代から親しくしていただいた磯部忠正氏、さらに九月二十三日にはかつての三老の唯一の生証人松枝茂夫先生を見送らなければならなかった。九十歳の誕生日九月二十五日を二日前にすることであつた。

敗残の私を無為のまま受け容れてくれたのは、いうまでもなく古巣の学習院だからであるが、私のわがままな講義につきあってくれた学生諸氏には感謝しなければならぬ。

三十年近く住みなした喜雨亭の草木も丈伸びて、私は花の栄枯盛衰を数多く見てきた。いま鬱蒼と茂った木陰の下、下草に滴る雨声を聞きながら、また新たなる想念が生ずるのを待つのみである。